



# わが国初の通信機器メーカー 明工舎

- 住所 東京都銀座3丁目3-1
- 交通アクセス JR山手線 有楽町駅 中央口 500m

## ■明工舎

明工舎は、わが国初の通信機器メーカーで、わが国の電気通信機器工業界の黎明期における発展に大きく貢献しました。現・沖電気工業株式会社のルーツでもあります。

明治14年(1881)、電信寮製機所を退所し独立した沖牙太郎により、東京京橋区新着(さかな)町19番地(現在の中央区銀座3丁目3番地)に自宅とともに設けられました。

これは、東京～横浜間に電信線を架設し公衆電報サービスが開始された明治2年(1869)から12年後、又、同区間において電話交換事業が開始される明治23年(1890)の9年前でした。

\*1 電信寮製機所 沖牙太郎が電信・電話技術を習得した工部省電信寮製機所は、明治6年(1873年)、通信機器(輸入品が多かった)を修理するために設立された官営工場です。白熱舎(現・東芝のルーツの一つ)や三吉工場を創設した三吉正一、田中製造所を設立した田中久重(二代目)など、わが国電機業界のパイオニア達を輩出しています。

## ■当時の地図での場所

図1は、牙太郎が明工舎を設けた年の3年後、明治17年(1884)の地図です。同工場のあった新着町19番地は、住所表示から「明工舎」と追記した赤丸印のところになります。



図1 明治17年(1884)の地図  
明工舎設立の3年後 京橋図書館蔵



写真1 明治22年頃の沖電機工場  
・創立から8年後、工場兼住宅を工場専用に改築するとともに、社名を沖電機工場に改称した頃の本社工場(創立の地)  
沖電気工業株式会社提供

外掘りや数寄屋橋門は未だ残っており、付近の町名も江戸時代のままです。

新着(さかな)町の町名は、幕府の御用魚屋が多く住んでいたのが由来と伝えられています。

## ■現在の状況

明治時代の地図(図1)を参考に、現在の地図(図2)において、明工舎の位置を追うと、堀は埋められて高速道路になっていますが、道路区画はほとんど同じで、赤丸印のところになります。

現地を訪ねたところ、明工舎のあった場所は



図2 現在の地図  
目標はZOE銀座ビル

「ZOE銀座ビル」で、住所は銀座3丁目3番1号、隣接するビルは東京電力銀座支社でした。

なお、辺りを調べてみましたが、当時を偲ぶようなものは見当たりませんでした。



写真2 明工舎跡 並木通り側から撮影



写真3 明工舎跡 東側から撮影  
(写真1と同じようなアングルと思われる)

これがわが国初の通信機器メーカーで、現・沖電気工業株式会社の創設の地になりました。

### ■当時のわが国における電気通信事業

わが国の電気通信事業は官営で進められました。電信線による公衆電報サービスは明治2年(1869)に開始、電話はこれから8年後の明治10年(1877)、2台のベル電話機輸入から始まりました。この輸入は、ベルの電話機発明からわずか1年後で、注目されるどころです。

輸入された電話機は、さっそく前述の電信寮製機所で模造が進められ、翌年には2台の電話機を完成しました。これが、わが国初の国産電話機とされています。

ところで、ベル電話機は、音声微弱で長距離での実用は困難でした。これの解決の先駆けになったのがエジソンのエジソン式電話機で、ベルの発明の翌年(明治10年)でした。

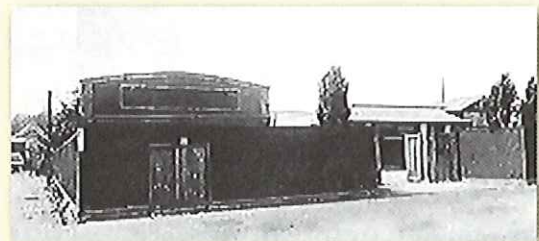


写真4 沖電気の原点となった石丸安世邸  
沖電気工業株式会社提供

### ■沖牙太郎と明工舎

沖牙太郎(おき きばたろう、1848～1906)は、広島県の農家の末っ子として生まれましたが、農業を嫌い、従兄弟の銀細工師について技術習得に励み、長州征伐時には藩の武具所で金具作りを担当しました。明治7年(1874)、数え27歳の時に銀細工師の腕だけを資本に上京しました。

上京後、同じ広島出身、電信寮(後に電信局)修技校(電信機の操作を教授する学校)の初代校長・原田隆造の書生をしながら修技校に出入りし、やがて同構内にあった前述の製機所に、雑役夫として本採用されました。自作の銀かんざしを添えた履歴書が功を奏したと伝えられています。

同所では、スイスの時計機械師ルイス・シェーファーに学び、仕事をしながら腕を磨いて、紙製ダニエル電池と漆塗り線を開発し表彰されました。

明治11年(1879)、仕事のかたわら電信局の下請けを始めました。場所は芝西久保桜川町(現・虎ノ門1丁目)の初代電信頭・石丸安世の長屋で、電鈴などを造りました。(写真4参照)

こうしながら独立の準備を進め、前述のとおり、明治14年(1881)、京橋区新着町に明工舎を設立しました。

### ■明工舎のその後

開業2ヶ月後(明治14年3月)に大ヒットを放ちました。エジソン式と同じ原理の電話機「顕微音機」を発明し、上野で開かれた第2回内国勧業博覧会で有功二等賞を受賞しました。これはエジソン式電話機が輸入される前のことで、「民間におけるわが国初の電話機製作」とされています。

なお、この受賞には「博覧会に行幸された明治天皇の目にとり、侍従が送話機に押し当てた懐中時計のコチコチ音を、受話器ではっきり聞きとった天皇は大きくなずいた」というエピソードも残されています。

東京～横浜間で電話事業が開始される前年の明治22年(1889)、新着町の住宅兼工場を工場専用増改築するとともに、社名を「沖電機工場」に改称しました。(写真1参照)

この頃、電話機の製作は官営の製機所が中心でしたが、架設や配線などの敷設工事は、東京ではほぼ独占的な地位を獲得し、最大手の通信機器メーカーとして成長しました。

その後、沖電気株式会社、沖電気工業株式会社に社名を変更し現在に至っています。